

異種混交の交流と発信の場として ——MICCS『インターセクション』創刊にあたって——

森 千香子
鈴木 越生

『棲み合いの論理』というタイトルの小さな本がある。

白い背景に燻んだ銀色で蝶が一匹、大きく描かれただけの美しい装幀と、手にとった途端、しっとり肌になじむ柔らかな質感にも惹かれたが、それ以上に「棲み合い」という聞き慣れない、つかみどころのない言葉が心に残った。

著者の中井衛はアマチュアの昆虫学者で、蝶に魅せられ、亡くなるまで蝶の観察に膨大な時間を注いだ。その過程で発見したのが、従来、定説とされてきた「棲み分け」（異なる種の間では必然的に種間競争が起き、棲み分けが生じる）とは異なる実態だった。異種の共存は必ずしも競争を引き起こすわけでも協働を生み出すわけでもない。ただ同じ空間で共存しあっている。中井はそのような事実を発見し、「棲み合い」と名づけた。

中井のアイデアはきわめてシンプルだが、それゆえに蝶を越えて、都市、さらにより広い世界での共存を考えるための手がかりにもなる。規範的な共生でもなければ単純な分断や対立でもなく、異種混交な人たちが仲良くするのも憎しみ合うのでもなく、互いに存在し、共存する。そのような現実を見つめる眼差しや、表現する言葉、分析する思考がいま、切実に求められている。「棲み合い」にはそのような可能性が感じられた。

MICCSは、異なるものたちの共存から生じる葛藤、対立、排除などの課題を検討し、「棲み合い」の可能性と条件を探る目的で2021年7月、同志社大学に設立された。構成員は専門分野が社会学、人類学、政治思想、歴史学など多岐にわたっているだけでなく、フィールドもアジアから北米、欧州、アフリカなど幅広い。このような「異種混交」のよさを活かした地域横断的、かつ領域横断的な方法で研究活動を行う。

本誌『インターセクション』は、このMICCSの研究所紀要として発刊される。『インターセクション』というタイトルには、MICCSの英語表記にも含まれている「インターセクショナルリティ」のアプローチや、地域・領域横断的という側面を重視したいことも念頭にあった。だが何よりも、異種混交のMICCSの傍らで長くつづく交流と発信の場になればという願いが込められている。

本誌はMICCSの紀要であると同時に、創刊からこの先5年間は、本センターが拠点の1つとなっているプロジェクトの成果物掲載先としても機能する。MICCSは今年度(2022年度)

より、人間文化研究機構が推進する「グローバル地域研究プログラム」下の4つのプロジェクトのうち、「グローバル地中海地域研究」プロジェクトの一拠点として活動している。2027年度末まで6ヶ年計画の同プロジェクトは、あくまでより息の長いMICCSの活動の一部だが、現在の活動は基本的に同プロジェクトの基金を用いておこなわれており、本号収録の諸論考もその活動に紐づいている。そこで同プロジェクトと本拠点での活動の概要を説明したうえで、以下につづく諸論考がどのようにこれと関連しているかを示しておきたい。

まず大元にある「グローバル地域研究プログラム」とは、端的に言えば、地域ごとの文脈を重視しその総体を解明していく地域研究の成果を十分に踏まえつつも、その縦割りのな限界を乗り越えようとする研究プログラムである。つまりは地域ごとの歴史・文化・社会・政治経済研究という経糸に、越境的な接触・摩擦・交流といった横糸をより意識的に織りあわせることで、複雑な動態的関連性を明らかにしていくことを目的とする。この目的に向け、「グローバル地中海地域研究」、「環インド洋地域研究」、「海域アジア・オセアニア研究」、「東ユーラシア研究」という4つのプロジェクトがゆるやかに連動していくというのが、本プログラムの全体像である。

そのなかで、本センターがその一翼を担う「グローバル地中海地域研究」は、地中海の周囲を北アフリカ／中東／ヨーロッパと切りわける見方に囚われず、地中海を介した世界的な人・モノ・知識の越境的関係を明らかにしていこうとするものである。このなかにあってMICCSは、元来、異なる存在同士の対立と共存の関係を実地に明らかにしていく諸研究が交流する場としてつくられたため、その射程が特定地域に限定されていない。本拠点は、初発から有しているこの越境的な性格を存分に活かし、とくに国境を超えた移動と、それに伴うポストコロニアルな課題の検討に注力している。具体的には、地中海を起点とする近代世界システムの誕生や戦後の移民政策を背景とする人々の移動の歴史を考察すると同時に、境界を超える人々を管理し、利用しようとする統治のイデオロギー（レイシズム、植民地主義）や政策と、それに抗する越境者たちの思想や運動を掘り起こしていく。

この全体の目的のもとで、現在は7つの研究班が活動している。本創刊号に収められた諸論考はいずれも、これらの班活動に関連した成果である。班活動の様子をライブ的に伝えるために、本誌はMICCSでおこなった講演やインタビューといった、口頭での発表や会話を元とする原稿も積極的に掲載していく。今回集まったこの種の原稿のうち、講演録とインタビューの一方は「コロニアリティと社会的実存」研究班の活動に基づいている。前者（土井）は同班が主催した公開研究会「コロニアリティの発見と謝罪・負の遺産化・脱植民地化—博物館の実践と舞踊の流用に対する先住民マオリの主張」の記録であり、現在もつづく植民地統治の影響（コロニアリティ）とそこから抜けだす脱植民地化の可能性をマオリの主張に探る、経験的知見に根ざした多彩な議論が展開されている。後者（アラタス・鈴木・西尾）は世界的な社会学者ファリード・アラタスへの同班メンバーによるインタビュー記事であり、

西洋の模倣ではない自律的な社会学・社会理論の構築を目指してきたアラタスの挑戦を聴きとり、彼の刺激的な研究を日本の社会科学界に導入することを試みる。もう一方のインタビュー（金）は「都市間連合と間文化主義」研究班の企画で、長期にわたって定住外国人の生活支援・不平等是正の取りくみに携わってきた金宣吉の活動とともに振りかえり、アカデミックの枠に収まらない豊富な歴史的経験を伝える有意義な記録となっている。

通常の記事形式での論考として本誌は、短めのエッセイ、書評、翻訳などを掲載していく。このうち今回は、エッセイと書評の寄稿があった。まず2つのエッセイはそれぞれ、「多文化都市と共生の危機」研究班（南川）と「都市間連合と間文化主義」研究班（上野）から寄せられた。前者は、政治的レトリックの応酬（「文化戦争」）に目を奪われることで多文化主義的实践の意義を軽々に切りすてるのではなく、批判的かつ経験的に多文化主義の到達と限界を見定めることを志し、現代の「共生の危機」の突破口を反人種主義運動における修復的司法の取りくみに探っている。後者は、都市内部の多様な住民同士の接触を重視する政策理念として近年耳目を集める「間文化主義（interculturalism）」について、この理念が日本・韓国・台湾といった東アジアにおいてどのように翻訳・拡張・変容されつつあるかを見晴らす研究の端緒を開く。両者とも、現在進行形のホットな題材をもとに、各班の活動に即した論考となっている。

つづく2つの書評は、それぞれ「コロニアリティと社会的実存」研究班（西尾）と「資本主義／民主主義」研究班（佐久間）から寄せられた。前者はフィリピン研究の最先端をいくカルロス・ピオコスの初著を対象とし、フィリピン社会における情動（affect）の政治的役割を文学的テキストから読みとる同書の刺激的だが難解な内容を丁寧に解説したうえで、マニラでのフィールドワークをつづけてきた評者自身の観点から同書の限界と意義を指摘する。後者ではアメリカ合州国にかんする政治評論で知られるジャーナリスト・歴史家トーマス・フランクの著書を対象に、ポピュリズムを単なる衆愚政治と一蹴してしまうエリートの政治観の偏向性を指摘する同書を導き手として、「リベラル」を再創造し民主政治の閉塞を打開する方途を探る。前者はピオコス本人を招いておこなった合評会、後者は読書会を中心とする普段の班活動の成果である。

以上の諸論考は越境的関係を理論的・経験的に明らかにしていくプロジェクト趣旨に適ったものだが、限られた班に関連する男性陣から寄稿されているように、創刊のため急を要した今号ではMICCSの活動の全体を提示するには至らなかった。だが今後より多彩な論考が集って交流し、『インターセクション』の名にさらにふさわしい内容を実現していく未来に向けて、本創刊号はその先駆けの役目を十分に果たすだろう。次号では今回駆け足で整わなかった編集体制を整備し、豊かな誌面を目指して寄稿しやすい環境づくりに努めていきたい。